

招清講演

Mechanisms of Pulmonary Oxygen Toxicity.

James D. Cropp
(Pulce University Medical Center)

記念講演

わが国における高気圧酸素治療の回顧と
展望楠原欣作
(名古屋大学医学部附属病院高気圧治療部)

当初は極めて零細で、確固たる組織もなく、存続さえも危ぶまれた日本高気圧環境医学会も年を追って隆盛に赴き、わが国最南端の地、沖縄において、記念すべき第20回総会が多数の会員の参集のもとに開催の運びとなったことは、まことにご同慶のいたりであり、またこの学会の設立に参画した一人として、些かならず感慨に堪えないところである。同時に、二十周年記念講演の機会を与えられたことは、不肖の身に余る光栄である。

わが国における高気圧環境医学の研究の歴史は長い、その中にあって高気圧酸素治療の歴史はそれほど長いものではなく、昭和30年代の中期に札幌医科大学の和田ら、東京大学の古田らがほぼ同時に開始した研究をもって嚆矢とする。

当時、海外でも国内でも、この治療に対する関心は熱狂的ともいうべき昂まりを示し、昭和41年に開催された第1回高気圧環境医学研究会（日本高気圧環境医学会の前身）は異常な熱気に包まれた中で開催された。しかし昭和42年および44年に2件の火災事故が発生し、5名の死者が出るにおよんでブームは忽ち鎮静化し、その後約10年間は僅かな研究者によって地道な研究が続けられた。しかしこの間の研究によって、欧米に先駆けて新しい適応が次々に開拓され、また安全性についても次第に周知され、治療手段としての評価が確立されるにおよんで、再びこの治療への関心が蘇り始め、やがて今日の隆盛を迎えるにいたった。

またこの間のわが国の高気圧酸素治療装置の改良の努力は特筆に値し、その技術は現在では世界水準を遙かに抜くものとなった。今日、わが国における高気圧酸素治療の隆盛の陰にあって、学会制定の安全基準に基づく装置改良による安全性の向上が果たした役割は極めて大きいと思われる。

高気圧酸素治療の二十年を回顧し、これらの現状に立脚して、その未来を展望したいと考える。